

[報告]

## 国際ワークショップ「ヨーロッパ言語地図の中のスラヴ諸語」に参加して

西原 周子

去る 2013 年 8 月 11 日（日）から 12 日（月）の間、北海道大学にて国際ワークショップ「ヨーロッパ言語地図の中のスラヴ諸語：地域・類型論の諸問題（Slavic in the Language Map of Europe: Questions of Areal Typology）」が開催された。このワークショップは、北海道大学スラブ研究センターおよび「科学研究費（基盤 B）東欧革命以降のスラヴ世界におけるマイクロ文語の総合的研究（代表：野町素己）」の主催によって開かれたものである。使用言語は英語であった。

本ワークショップの目的は、20 世紀末から 21 世紀にかけて、ヨーロッパを言語圏として見る立場を取るマーティン・ハスペルマス、ヨハン・ヴァン・デル・アウヴェラらによって発展した、いわゆる「標準的平均的ヨーロッパ語（Standard Average European、以降 SAE と表記する）」研究を批判的に再検討することである。その主眼は、従来の研究では特に十分に扱われているとは言えないと思われるスラヴ諸語を題材に、地域言語学、言語類型論、社会言語学、歴史言語学といった多角的な視点から SAE を論じなおすことであった。

このために、本ワークショップでは、スラヴ諸語を題材として地域言語学に様々な視点から取り組んでいる、欧米を中心とした 5 か国 10 人の研究者が報告を行った。このうちの多くは、本邦でもよく知られた、文字通り世界のトップクラスの言語学者である。本学スラブ研究センターでは、2 年前にも世界の優れたスラヴ語研究者が集った大規模な国際シンポジウム「スラヴ諸語における文法化と語彙化」が開催されている（2011 年 11 月）。本ワークショップの開会挨拶で宇山智彦センター長も述べたように、言語研究はあらゆる地域研究の基礎として重要である。その意味でも本邦において、このような重要なテーマを扱った本格的なスラヴ諸語研究の国際研究集会が組織されることは、スラヴ語研究だけではなく、スラヴ・ユーラシア地域研究に大きく資するものとして歓迎すべきことであろう。

本ワークショップのプログラムは、基調講演と 3 つのセッションからなっている。詳細についてはスラブ研究センターのホームページ <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/seminors/src/2013.html> を参照されたい。

まず、基調講演を務めたのはベルント・ハイネ（ケルン大学）である。ハイネの専門は、アフリカ諸言語研究、言語類型論、言語理論（特に文法化理論）であるが、SAE 研

究にも大きな貢献をした研究者として著名である。ハイネの報告「文法化における等価の公式：モリーゼ・スラヴ語を題材に」は、イタリア中部に分布する少数話者言語モリーゼ・スラヴ（クロアチア）語の不定冠詞の使用を例とし、言語接触によって引き起こされた文法化の過程について分析するものであった。冠詞の使用はSAEの主要特徴の一つであり、モリーゼ・スラヴ語はその点においてはSAEに近いと言えるものの、その他の特徴は、依然としてスラヴ語に典型的なものであり、SAEの核心言語に加わるような類型論的变化は経ていないという結論であった。

基調講演に続いて、第1セッション「バルカンの難問」が行われた。最初の報告者ブライアン・ジョセフ（オハイオ州立大学）は、「大言語と小言語、スラヴと非スラヴ：社会言語学的類型論」という題目の研究報告を行った。ジョセフは、スラヴ語（特にマケドニア語）、およびそれに隣接する非スラヴ語（特にアルバニア語、ギリシャ語やリトアニア語）を題材とし、言語の規模による類型について、少数話者言語が生き残る社会的条件という観点から論じた。

次にアンドロイ・ダニレンコ（ペース大学）および野町素己（北海道大学）による報告「バルカニズム、カルパティアニズム、そしてカルパティア・バルカニズム：我々はカルパティア・バルカン・マクロ言語圏について論じられるか」であった。この報告では、従来のバルカン言語研究でこの地域の文法的特徴に大きな注目がなされてきたのとは対照的に、カルパティア地域の研究は語彙・文化研究が中心になってきたことを批判的に論じたうえで、カルパティアのウクライナ語諸方言の音韻・文法特徴がバルカン諸語と共通することを明示し、カルパティア・バルカンを統合したマクロ言語圏として扱える可能性について地域的、系統的、および類型論的手法によって論じた。この3点によるアプローチは、第二日の第2セッション「(地域的) 類型論と歴史との出会い」でも議論された。

第二日は、セッション「SAEとその所産」に始まった。まず、ヘニング・アンデルセン（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）は「スラヴ語とSAEの誕生」と題した報告で、言語圏が類型論的存在であると同時に歴史的産物であることを強調し、主に通時的視点から形容詞によって表示される「定性」が、バルト・スラヴ・ゲルマン言語圏で200年代から発達してきたことが提示され、その文脈において北ロシア方言の後置冠詞に類似した *-to-* の特徴が論じられた。加えて、スラヴ祖語の動詞体系の発達も論じられ、過去時制の簡素化はヨーロッパ言語圏の形成の早い段階で起こったことが示された。

続いて、ヤドランカ・グヴォズダノヴィッチ（ハイデルベルク大学）は、「スラヴ諸語の証拠に照らしたSAE再考」という報告で、SAEの研究は、類型論上の内部関係の考察が欠けているだけでなく、精密な定義も持たない特徴の集合体であるという批判が行われた。そして、スラヴ諸語やゴート語などの事象を再検討したうえで、

SAEの特徴は歴史的に直接的な関連の無いインド・ヨーロッパ諸語に存在し、それらは民族移動時代以前にも見られること、その構造的類似性はインド・ヨーロッパ祖語に端を発するものであり、その共通特徴が拡大・確立したのは、民族移動時代以降の聖書翻訳と言語接触が原因であると結論づけた。

このセッションの最後を飾るのはジョージ・トーマス（マクマスター大学）である。トーマスは「汎ヨーロッパ的な観点によるドナウ河流域のスラヴ諸語に見られるいくつかの類型論的特徴」という研究報告を行った。トーマスは、この地域のスラヴ諸語がSAEの類型論的傾向にどの程度関与しているか、形態・統語上の特徴から考察した。冠詞の存在、チェコ語とドイツ語の接触による迂言的未来表現、完了形のみによる過去時制、複合大過去といった特徴が、SAEに一致するものとして指摘された。

続く第3セッション「(地域的) 類型論と歴史との出会い」は、まずビョルン・ヴィーマー（マインツ大学）の報告「『マトリョーシカ』とさまざまなスラヴ諸語を含む地域的集合体」によって始まった。ヴィーマーは、スラヴ諸語の類型論における方法論と実験的争点として、方言地理学の欠点を埋めることができるアプローチを提案した。すなわち、系統的な類縁性、地域的な類縁性と言語接触、および類型論的特徴と世界的傾向の3点を頂点とするディシプリンの三角形に基づいた、「マトリョーシカの原則」と名付けられたアプローチである。その分析例としてヴィーマーは、東環バルト言語圏におけるn/t分詞の用法、再帰動詞と相互動詞の多義性を挙げた。今後の研究の方向性として、文献学的なアプローチと地域言語学的研究の総合的な研究が必要であり、特に数量的分析が地域言語研究にも有効であることが強調された。

続く三谷恵子（東京大学）の報告は、日本語の「～がる」、「～ている」、「～そう」に含まれるエヴィデンシャリティの機能を、セルビア・クロアチア語の動詞 *izgledati* の機能と比較して論じ、双方のカバーする領域を明らかにするものであった。また、2種類のロシア語の否定文 (*butylki net v xolodil'nike* (話者の直接的な観察に基づく発話) / *butylka ne byla v xolodil'nike* (直接的な観察の欠如による発話)) が「隠れた」エヴィデンシャリティの形式である可能性も指摘された。三谷報告は、厳密に言えば、地域言語学や言語類型論からは離れた日本語とセルビア・クロアチア語の対照研究だったが、特に参加者の関心が高かったテーマでもあり、報告後には多くの議論を呼んだ。

最後の報告は、刺激的な学説によってスラヴ語学界の「異端児」と呼ばれるポール・ウエクスラー（テル・アヴィヴ大学）による研究報告「スラヴ・イランおよびスラヴ・チュルク部族連合の言語再建の新たな試み：イディッシュからの視点」であった。ウエクスラーは、クロアチア人、セルビア人、チェコ人、アヴァール人、ブルガリア人等の言語を再構築する試みについて、ペルシャ語だけでなくイディッシュ語を土台とする議論を行い、キエフ・ボレスラ地方およびラウジッツのイラン系ユダヤ人の言語が、「再語彙化」すなわち文法および音韻構造を基本的に保ったまま、語彙だけを変化させた

結果、現在のイディッシュが成立したという説を展開した。実証的な報告というよりも、壮大な仮説という印象だが、アラビア語、ヘブライ語といった通常スラヴ語学者が通じていない分野を多く含むだけに、報告後は充実した討論が行われた。

以上のように、本ワークショップにおける報告は、お互いに詳細な証拠を提示し合いながら、時にスラヴ諸語以外の話題も含み多岐にわたり、全体的には相互に関連性をもって補完し合い、ホットな論点に満ちていた。そして、地域言語学、言語類型論、社会言語学、歴史言語学など様々な分野を専門とする研究者がSAEを批判的に再検討し、現時点で挙げられている成果の検証と課題の整理がなされた。その一方で、「SAEをスラヴ諸語の視点から再検討する」という課題からは、やや離れた論点の報告もあったが、将来の議論に有用な観点を提供しているといえよう。また、本ワークショップの課題は今回で議論しつくされたわけでもない。特に、SAEへの理論的な挑戦という面には、まだまだ十分に目標に到達していないところもあっただろう。今後、野町とダニレンコの編集によって、SAEに関する論文集の編纂が予定されていると聞く。本ワークショップでのこれらの問題点のいくつかが解決され、さらに十分扱われていない分野（特に東スラヴ諸語）の論文を補強するなどさらなる発展が期待される。